

# 旭労災病院ニュース

病院情報誌 第8号 平成18年7月1日発行

発行所：旭労災病院

〒488-8585

尾張旭市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>

## 旭労災病院泌尿器科紹介



泌尿器科部長 松原 広幸

2005年7月に愛知医大泌尿器科から当科に就任いたしました松原です。先代の泌尿器科部長石黒先生より当科を引き継ぎ、あっという間に11ヶ月が経ち、やっと落ち着いたところです。当科の常勤は私1人のため、石黒先生及び、愛知医大泌尿器科より青木講師に来ていただき、3人で以下のような診療体制を取っております。

外来日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
外来担当医	松原	松原	石黒	青木(愛知医大泌尿器科)	松原

### 当科の特色

#### 1 検査体制を充実させていきます。

前立腺疾患に対して: 高齢化社会が進み、前立腺に対する関心が広まりつつある現在、前立腺肥大症や前立腺癌の診断治療は当科において、かなりのウエイトを占めております。来院された患者様には、問診診察を行なったのち、超音波検査にて前立腺の大きさや残尿計測を行ない前立腺の評価を行なっていきます。さらに前立腺癌の鑑別のためPSA検査を行い、4.0以上の高値の場合、積極的に前立腺生検(12カ所)を行なっています。現在前立腺生検は月平均10例を突破し、週4例行なう場合もございます。瀬戸市と尾張旭市において今年から前立腺癌検診がスタートいたしますが、PSA高値の症例の場合は、是非当科までご紹介ください。

腎尿管膀胱など尿路疾患に対して: 腰痛、血尿や膀胱炎症状の患者様に対しても、積極的に鑑別診断を行い、膀胱癌、腎癌の発見のために、膀胱鏡検査や排泄性尿路造影検査、CT、MRI検査を出来る限り早期に行なっています。

排尿管理について: 当科はケアプラザ瀬戸や労災リハビリテーション作業所、及び近隣の老人保健施設と密接に診療体制をとり、神経因性膀胱の患者様のバルーンカテーテル管理や膀胱瘻管理を行っており、緊急時には外来処置や入院治療を迅速に行なっております。排尿管理にお困りの症例がございましたら遠慮なくご相談ください。

#### 2 治療について

手術に関しては、木曜日の午後を手術日とし、毎週1~2例の経尿道的手術(前立腺切除、膀胱腫瘍切除など)を主に行なっています。当科では全身麻酔による長時間の手術や重症術後管理は困難ですので、そのような症例の場合、愛知医大、名大、名市大など患者様のご希望される病院を御紹介しております。なお当科ではESWLやレーザー治療を行なっていません。

まだまだ未熟ではございますが、スタッフ一同、地域に根ざした医療を進めてまいりますので、ご指導のほど宜しく御願ひ申し上げます。

# Drug eluting stent(DES)に関して

循環器科部長  
前田 健吾



9

4月1日から旭労災病院の循環器科に赴任してまいりました前田健吾です。これまでの4人体制から一人人数が減り、3人体制となりましたが、名古屋大学循環器内科から非常勤の医師も派遣していただいております。これまでと変わらず急性心筋梗塞や不安定狭心症などの急性冠疾患に対しても対応させていただきたいと考えております。

さて、当院では約年間100例の冠動脈カテーテルインターベンション(PCI)を施行していますが、時代とともにその内容も変化してまいりました。再狭窄率の面において、1990年代半ばに数々の臨床試験の結果より、バルーンの拡張に対するステントの優位性が証明されて以来、現在に至るまでPCIはステント留置が主流となっています。しかし、新生内膜の肥厚によるステント内再狭窄は15-30%認められ、この再狭窄をいかに抑制するかが近年までの課題でした。様々な内服薬による再狭窄予防も試みられましたが有用なものはなく、主な理由としては局所での薬剤濃度の不足が考えられていました。この問題を解決すべく開発されたのが薬剤溶出性ステント(DES)です。現時点において日本で使用可能なのはCypherステントです。現在当院でもPCIのおよそ90%に使用されています。Cypherステントには免疫抑制剤のsirolimusがコーティングされています。

大規模臨床試験ではCypherステントの再狭窄率は10%以下と従来のBare metal stentに対し明らかな有用性が認められました。しかし、DESではその薬剤の作用により、ステント表面に内皮細胞が被覆しにくいという特徴があるため、Cypherステントを使用した後の抗血小板療法は従来よりも長期間行われることが推奨されています。アスピリンのLife longでの投与に加えて、パナルジン(panadol)を最低でも6ヶ月、問題がなければこちらでもLife longで投与を続けていくという選択がなされていることが多いようです。パナルジンには御存知のように肝障害やTTPなどの副作用も知られており、第二選択としてはプレタールが用いられます。Cypherステントを留置された患者様のフォローアップをお願いさせていただくことも今後は増えてくるかと思いますが、何か御不明な点がございましたらいつでもお問い合わせください。

